文化芸術のチカラ∞ガイドブック

Power of
Arts and Culture
∞
Guide Book

～港区ならではの文化プログラムをとおして～

文化芸術のチカラ∞ガイドブック
～港区ならではの文化プログラムをとおして～

2019年3月 Minato City 港区

Power of
Arts and Culture
∞
Guide Book

Minato City 港区

はじめに

Prologue

港区の人口は、今、増え続けています*1。
多くの外国人が住み*2、多くの人が働き、学び、訪れています*3
――港区には様々な文化や習慣、生活様式を持つ人々が暮らし、集います。

日本美術や先進的なアートが集積する美術館、様々な規模の劇場、日本の近代化を象徴する史跡など
――港区には多くの文化資源があり、アマチュアからプロまで、多様な主体による彩りあふれた文化芸術活動が日々展開されています。

文化芸術には、どんなチカラがあるでしょうか。

このガイドブックを読まれる多くの皆さんに、文化芸術の魅力や、文化芸術が持つ意外な可能性を感じていただければと思います。
そして、共に「文化の港」をめざすパートナーとして、新たな一歩を踏み出していただければ幸いです。

＊1　2017年２月に54年ぶりに25万人を回復。2027年には30万人となる見込み。
＊2　区の人口の約８％が外国人。
＊3　政令指定都市を除く区市町村の中で全国最多の昼間人口（2015年国勢調査）。

港区平和都市宣言

かけがえのない美しい地球を守り、世界の恒久平和を願う人びとの心は一つであり、いつまでも変わることはありません。

私たちも真の平和を望みながら、文化や伝統を守り、生きがいに満ちたまちづくりに努めています。

このふれあいのある郷土、美しい大地をこれから生まれ育つこどもたちに伝えることは私たちの務めです。

私たちは、我が国が『非核三原則』を堅持することを求めるとともに、ここに広く核兵器の廃絶を訴え、心から平和の願いをこめて港区が平和都市であることを宣言します。

昭和 60 年 8 月 15 日

港　区

文化芸術の
チカラ∞
ガイドブック

Power of
Arts and Culture
∞
Guide Book

世界に開かれた「文化の港」をめざして

多様なチカラが織りなすパフォーマンス&トークセッション

2018/11/4 リーブラホール

第1部 パフォーマンスⅠ
人と地域を元気にする盆踊り実行委員会
「港区発掘ご当地曲盆踊り」

パフォーマンスⅡ
スロームーブメント実行委員会
「Onna Matsumushi(女松虫)」

第2部 基調講演
「世界に開かれた文化の港をめざして」
港区文化芸術振興プラン検討委員会委員長
片山 泰輔

トークセッション
「多様性のチカラを生かすためには」
パネリスト
青木涼子(ensemble-no)
本間友(慶應義塾大学アート・センター)
北島由記子(人と地域を元気にする盆踊り実行委員会)
友川綾子(スロームーブメント実行委員会)

東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会（以下「東京2020大会」という。）に向けた文化プログラムや、区がめざしている姿を広く区民の皆さんに知っていただく機会として、港区文化プログラム連携事業*指定団体によるパフォーマンスやトークセッションを行いました。

＊港区文化プログラム連携事業…区と文化芸術活動団体が連携し、東京2020大会に向けた気運醸成及びレガシー創出に向け、港区ならではの文化プログラムを展開。

Performance & Talk Session

第1部 パフォーマンス

パフォーマンスⅠ
港区発掘ご当地曲盆踊り

出演：人と地域を元気にする盆踊り実行委員会
日本太鼓「大角会」

港区発掘ご当地盆踊り曲から「麻布坂径小唄」「東京タワー音頭」「江戸節めをと姿」及び港区から東京2020大会を応援する「跳べ！2020」を披露。「麻布坂径小唄」は幼い頃から民謡を学んでいる本橋都生子さんが高校生の時に唄ったもので、ご本人の生の唄にのせて。振付は舞踊家の佐藤匠さんが中学生の時に手掛けたもの。

パフォーマンスⅡ
Onna Matsumushi（女松虫）

スロームーブメント実行委員会
演出：金井ケイスケ
出演：森田かずよ、定行夏海

時空を超えた2つの霊の友情の話である能の「松虫」をもとに創作されたダンス作品。障害の有無を超え、２人のダンサーの身体が触れ合い、あたかも溶け合って一体化していくようなパフォーマンス。
パフォーマンス後には、２人のダンサーへのインタビューも。
作品の解説や、パフォーマーとしての思いなどが語られた。

第２部

基調講演

「世界に開かれた文化の港をめざして」

港区文化芸術振興プラン検討委員会委員長
静岡文化芸術大学 教授
片山泰輔

港区の文化的特質と課題

区内在住者は約25万人であるのに対し、昼間人口は94万人強（２０１５年国勢調査）、ホテル客室数は２万６２４７室（２０１７年３月現在）。港区では、「区民」を「区内に居住し、勤務し、在学し、又は滞在する者をいう。」（港区文化芸術振興条例第２条）と定義し、在住・在勤・在学者だけでなく、滞在する者をも含む、すべての人を施策の対象としています。

港区には、文化芸術施設が集中立地し、歴史的建造物や放送局、デザインやファッション等の文化産業が集積し、全国最多の80か国以上の大使館等が立地しています。区民意識調査の結果からも、港区は「文化的に充実した国際都市」と言うことができます。

一方で課題もあります。1つ目は、区民が希望するほどには、国際文化交流が実現しているわけではないということ、2つ目は、アジアの都市間競争が激化する中で、文化産業が今後も区内に拠点を置き続けるかどうかということ、3つ目は、「育児・介護等を抱えている」、「経済的余裕がない」などの理由で、充実した文化芸術環境を十分に享受できていない人が港区においても多数いるということです。文化権の保障については、「文化芸術基本法」に「文化芸術を創造し、享受することが人々の生まれながらの権利である」と盛り込まれています。「港区文化芸術振興条例」でも、年齢や障害の有無、国籍等にかかわらず、誰もが文化芸術を鑑賞・参加・創造できる環境の整備が必要であるとしています。

４つ目は、共生社会は実現しているかということです。外国人や障害者、あるいは性的マイノリティに対する差別や偏見は、いまだに存在しています。

５つ目は、東京は文化的には輸入超過の状態であり、創造的発信が十分になされているかという問題です。

多様な人と文化が共生する世界に開かれた「文化の港」に向けて

これらの様々な課題を踏まえ、「多様な人と文化が共生する 世界に開かれた『文化の港』」を将来像とする「港区文化芸術振興プラン ２０１８年度～２０２３年度」が策定されました。

港区は文化的に恵まれた環境かもしれませんが、現状は完璧ではありません。文化権の保障を１００パーセントに限りなく近づけることは、多様性を尊重する社会を実現していくことであり、本プランの意義はここにこそあります。

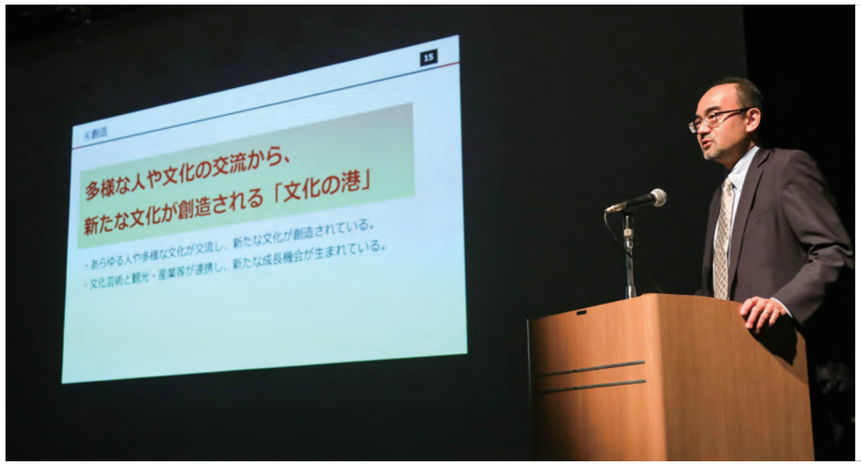
他者のことを〝知らないこと〟が、恐怖や敵意を生み出します。踊りや音楽など文化芸術をとおして相手のライフスタイルや価値観を知り、相互理解を深めることで、共生社会が実現し、さらには世界平和へとつながります。

そして、互いに多様性を認め合い、誰もが共生でき、表現の自由が保障された環境においてこそ人々の創造性が発揮されます。こうして、港区が創造的で開かれた「文化の港」となることで、世界中の人や企業を惹きつけ、世界の都市間競争の中で、東京、日本全体の魅力向上に寄与することになります。

東京２０２０大会を契機とした文化プログラムと共に

文化プログラムはスポーツ大会の余興ではなく、オリンピック憲章に定められたオリンピックの本質です。東京２０２０大会は、「すべての人が自己ベストをめざし（全員が自己ベスト）」、「一人ひとりが互いを認め合い（多様性と調和）」、「そして、未来につなげよう（未来への継承）」を３つの基本コンセプトとしています。

この３つの基本コンセプトは、区の将来像と共有できるところが多くあります。港区ならではの文化プログラムを、多様性や創造性をもって実施することにより、レガシーの創出、すなわち未来に残すべき伝統、人材、知恵等を継承し、港区のみならず、東京、ひいては日本全体の魅力を向上させてくれることに期待いたします。



かたやま たいすけ　プロフィール
静岡文化芸術大学 教授・港区文化芸術振興プラン検討委員会委員長／専門は財政・公共経済、芸術文化政策。公職として日本文化政策学会 副会長、日本アートマネジメント学会編集委員長、文化経済学会〈日本〉理事長等。国や自治体の審議会委員等を多数務め、計画策定、政策評価、補助金審査等に従事。1995 年、芸術支援の経済学的根拠に関する研究で日本経済政策学会賞、2007 年、著書『アメリカの芸術文化政策』で日本公共政策学会賞（著作賞）受賞。共編著に『アーツ・マネジメント概論 三訂版』（水曜社）等。静岡文化芸術大学において文化庁補助事業として実務家向け教育プログラムを開発・実施。その活動は一般社団法人文化政策経営人材研究所（港区）に引き継がれ、現在、同研究所統括アドバイザー。港区在住。

Talk Session

第２部 トークセッション

「多様性のチカラを生かすためには」

文化の港づくりに向けた可能性と課題

片山　本日、コーディネーターを務めます片山です。まずは、港区で活動する上で、港区ならではの良さ、あるいは苦労といったものがあれば、お聞かせください。

青木　チャレンジングな企画に助成をいただけるのは大変ありがたく、おかげで自分のキャリアを積むこともでき、レパートリーも形成されてきました。一方で、場所選びに苦労しています。ある程度収容人数があり、大きすぎず、客席が近く、音響が良い手頃なホールがありません。創造過程の芸術にとって、使い勝手の良い規模のホールがない点が、課題と言えるでしょうか。

本間　区の文化資源は豊富にあります。ただ、あまりにも多くて、何か新しい活動を始めようとしても、既に出尽くしている感じがします。これは、幸運なことですが、難しさにもなっていると感じています。現代文化の縮図で、コト・モノがあふれ過ぎているがゆえに、自分の関心や希望を投影する対象がいっぱいあっても、それを見つけ出すのが難しい点があると思います。

北島　私たちは練習会場には事欠かず、助かっています。公共施設では、老人会など、他の団体の方とも出会えますし、人と人とがつながり、人と人との交流が生まれる良さがあると思います。ただ、苦労する点を挙げれば、大人数での練習だとより大きな会場、学校の体育館などでないとできず、それが借りられないので困っているということはあります。

友川　今年の六本木アートナイトで、障害のある人もない人も、誰もがアートの街歩きを楽しむための「インクルーシブ・ツアー」事業を行いました。その報告会で、地元の商店街の方から、ハード面で困ったことがあれば教えてほしい、できれば直していきたい、といったご発言があり、港区は意識が高く、時間を持って文化に接してもらいたいと思います。

本間　ネットワークをつくっても日々のメンテナンスが大変で、一つの組織でやりきれるものではないと思います。本当に機能するネットワークをつくるには、分散型のイメージで考えていく必要があり、区民の皆さんの協力が必要であると考えています。

北島　行政は縦割りだとよく言われますが、そうだとしたら、私たちの活動は〝横糸紡ぎ〟で、人と人とを横に結びつけることだと考えています。盆踊りの歌詞には、今は使わない言葉もあり、昔の文化が映し出されています。盆踊りを通じて高齢の方との交流が進みますし、発災時には、共助につながっていくと考えています。

友川　体験し、体験を共有することには力があると思います。体験を共有する中でお互いの個性を認め合い、多様性を頭だけでなく心と体で理解することが、多様性を育む土壌になると考えており、今後も継続していくための仕組みがほしいと考えています。企業などもっと様々な団体に参加してもらい、体験する中で多様性を享受できるような場、ネットワークづくりができればと思います。

終わりに

片山　港区には、豊島区の池袋、台東区の上野や浅草、あるいは渋谷や新宿、銀座といった拠点がありません。その点、多様性に富み、中心がないのがむしろ港区の特徴だと思います。しかし今は、多様なものがばらばらで存在しています。文化プログラムを通じて、これまで出会わなかった、協働することのなかった人たちが一緒に活動できるような基盤をつくっていくことで、港区が２０２０年以降も世界に開かれた「文化の港」として、より発展し、世界に貢献していくことにつながっていくのではないか――皆さんの話を聞いて、その思いを強くしました。

パネリスト

ensemble-no（アンサンブルノウ）理事長
能 × 現代音楽アーティスト
青木涼子 あおき りょうこ

日本の古典芸能である「能」を、国内外の現代作曲家に委嘱し作曲された「謡（うたい）」を素材とした音楽によって上演する活動を展開、能の新たな可能性を世界に発信している。

慶應義塾大学
アート・センター
本間 友 ほんま ゆう

リサーチをキーワードとする文化ネットワークをめざし、イベントを通じた文化資源の紹介、プロジェクト誌の発行やレファレンス、発信連携などの活動を行っている。

人と地域を元気にする
盆踊り実行委員会 代表
北島 由記子 きたじま ゆきこ

埋もれたご当地盆踊り曲を発掘し、一緒に踊って継承する活動を通じ、人と人を結びつけ、人と地域を結びつけて、地域の課題の解決をめざす活動を続けている。

スルームーブメント実行委員会
SLOWLABEL 広報ディレクター
友川 綾子 ともかわ あやこ

年齢、国籍、障害の有無を超え、多様性と調和のメッセージを発信していくことを目的に、障害者によるパフォーマンスやソーシャルサーカスによるワークショップを行っている。

区民へのメッセージ

片山　最後に、区民の皆さんにメッセージをお願いします。

青木　エンターテインメントと芸術は違い、芸術は考えさせる力のあるものです。区民の皆さんが、考えるきっかけとなるものをつくっていきたいと思っています。港区は情報があふれ過ぎていて、追いかけるだけでも大変で、本当に文化が生まれるのか疑問もありますが、区民の皆さんには、静かに、考えるプして、眠っている人材を生かす仕組みをつくり、２０２０年以降に残していきたいと思っています。

友川　社会的課題の解決を目的とするプロジェクト「ソーシャルサーカス」こそが、東京２０２０大会のレガシーとして、自分たちが残していけるものではないかと期待を込めつつ活動をしています。東京２０２０大会は、障害者が街に出て文化活動を行う際の心のバリアをほぐす機会になるのではないでしょうか。

2020年に向けて、そして2020年以降に残したいもの

片山　次に、東京２０２０大会の文化プログラムに向けて、どういったものを発信し、２０２０年以降に何を残すべきと考えていますか。

青木　レパートリーをつくり、それを世界中で演奏して、今後に残せるものをつくっていければと考えています。先ほどの基調講演では、日本は文化輸入大国であるという話がありました。西洋文化をいったん受け入れて発展させるのではなく、日本の伝統芸能の上に立って、日本初のもの、または全く新しいものを日本から世界へと、発信していきたいと考えています。

本間　既にあるものをつないでいくための仕組みを、２０２０年に向けて残していくことができればと考えています。例えば、日本文化を紹介するオンラインコース（インターネットを利用した通信教育）を開設し、その受講生が来日した際、ダイレクトに文化イベントなどに巻き込んでいく、あるいは帰国後にｅラーニング（コンピューターを利用した学習）を行うことで長く日本文化に触れ、関心を維持してもらうなど、これまでと違った取組ができればと考えています。また、文化資源に関しては、場所やお金、情報、ノウハウなどといった資源の共有化も考えてみたいと思っています。

北島　港区には、実は活発に動いている人たちがたくさんいます。２０２０年に向けて、こうした人たちの中からこれはと思える人材をピックアップして、発展性のある地域だと感じました。一方で、私たちの活動は地縁型ではなく、テーマ型のコミュニティづくりであることから、これからどのように地域との接点をつくり、継続していくかが課題ではないかと感じています。

Activity Reports

ここでは、2018年度港区文化プログラム連携事業の中から、実際に文化芸術のチカラを使って、新たな価値を生み出している3つの取組を紹介します。

文化芸術活動を通じて
新たな価値を
生み出している
3つの取組

C

文化芸術のチカラで
歴史と現代をつなぐ

慶應義塾大学 アート・センター

「都市のカルチュラル・ナラティヴ」は、区内の寺院や現代ギャラリーなど新旧様々な文化資源に光をあて、学術的な成果とつなぎ合わせることで、過去から現在につながる「文化の物語」として、その魅力を人々に伝えていく試みです。
「物語」をとおして、人々が地域の文化資源に新たな視点を持ち、“身近なもの”“自分ごと”として捉え直すきっかけとなることで、文化資源を守り、受け継いでいくことにもつながっていく、当団体の取組を紹介します。

B

文化芸術のチカラで
人と人とをつなぐ

スロームーブメント 実行委員会

「ソーシャルサーカス」を日本でいち早く取り入れ、2017年度から、区内でワークショップとして実践しています。ヨーロッパで25年以上前に始まったソーシャルサーカスは、社会性や協調性、創造性などが総合的に育まれることが期待されると共に、国籍や障害の有無、年齢、性別、経済的な格差にかかわることなく人々をつなぐための有力な手段として注目されています。
「多様性と調和」のある世界をめざし活動する、当団体の取組を紹介します。

A

文化芸術のチカラで
地域をつなぐ

人と地域を元気にする 盆踊り実行委員会

昭和の時代から区内で踊られていたご当地盆踊り曲を掘り起こし、区内各地域に出向いて草の根の練習会を重ね、子どもから高齢者まで、地域の人々が共に集い踊ることができる場を創出しています。
2018年には、港区から東京2020大会を盛り上げ、後世にまで伝え残していくための新たな盆踊り曲「跳べ!2020」を制作・発表しました。
人口が増え続ける港区において、新旧様々なご当地盆踊り曲をとおして地域をつなぐ、当団体の取組を紹介します。

第五回 港区発掘ご当地曲盆踊り大会

A

文化芸術のチカラで 地域をつなぐ

人と地域を元気にする 盆踊り実行委員会

「第五回 港区発掘ご当地曲盆踊り大会」

多様な人たちがつくる踊りの輪

2019年3月17日(日)、陽射しが暖かく、きれいに晴れた盆踊り大会2日目。午後1時を回り、開会を告げるアナウンスで始まった盆踊り大会は、最初こそ人が少なめでしたが、徐々に大勢の人が踊りの輪に加わり、二重だった踊りの輪は三重へ、更に四重それ以上へと広がっていきます。

踊りの輪の中には、外国人や小学生ほどの女の子とその父親、赤ちゃんを抱っこして踊る女性もいます。ばっちり決めた浴衣姿の女性が、踊りの輪を前に、ベビーカーに乗せた子どもの傍らで踊り、輪の中に入る機会をうかがっています。

車いすの高齢女性が、介助者に伴われ踊りの輪に近づいてきました。施設に入所する方だと言います。踊る皆の姿を見て手の振りを始めた女性。ご一緒にどうぞと促され、介助者が押す車いすは踊りの輪に加わっていきました。

子どもも高齢者も、日本人も外国人も、男性も女性も、車いすの人も、洋服の人も浴衣の人も、まさに、様々な人が、踊りを楽しんでいます。練習会で会った方に盆踊りの楽しさを聞いたら、迷うことなく「輪になって踊る一体感がたまらない」と。

曲と太鼓の音に惹かれ、通りすがりの人たちも足を止め、踊りの様子を興味深げに眺めています。中には、目の前で踊る人たちの動きに合わせて、自然に体が動き始めている人も。ベンチに腰かけながら、楽しそうに手の振りまねを競い、今にも踊り出しそうな外国人旅行者もいます。

大会本部に近い場所には、全体に目配りをしつつ踊り、団扇が必要な曲になると団扇を配り、車いす女性の介助者に輪に入らないかと促す、人と地域を元気にする盆踊り実行委員会代表の北島由記子さんの姿がありました。

時代を隔ててつながる踊りの輪

1曲目は「跳べ!2020」。東京2020大会を港区から応援し、区民の大会への意識昂揚を目的として制作された新曲で、港区文化プログラム連携事業である盆踊り大会の目玉です。港区の土地柄を織り込んだ歌詞で、パレードでも踊れるように振りを工夫しているとのこと。

プログラムに沿って、次々と曲がかけられます。アナウンス

一般公開練習会

日本太鼓「大角会（おおすみかい）」によるパフォーマンス

が、新たな発掘曲について、音源制作にあたりどんな苦労があったかなども織り混ぜながら、ご当地とのゆかりを紹介します。歌詞を聞けば、かつての港区の姿が目に浮かびます。

「麻布　麻布　と踊ってみれば／花は満開　人を呼ぶ／町の真ん中　タワーも見える／みんな一緒に　輪をつくろう」（新たに発掘された「麻布音頭」）

場所は違えど、東京タワーがそびえるすぐそばで、太鼓の音や踊りが人を呼び、大きな輪をつくる目の前の光景は、歌詞で描かれている姿と数十年を経て重なります。

ご当地曲は港区のかつての姿を伝える歴史史料

一方で、盆踊り曲に歌われた港区の姿には、今とは全く異なるものもあります。２０１８年に発掘され披露された「赤坂豊川音頭」は、かつての豊川稲荷の姿を伝えています。この歌がつくられた頃は、豊川稲荷が面する国道２４６号線＝青山通りの道幅は今の半分で、その敷地は現在の中央分離帯辺りにまで及び、広々とした境内では盆踊り大会が開かれていました。そこで踊られていたのがこの曲です。１９６４年の東京五輪のための２４６号線拡幅工事によって敷地が狭くなり、盆踊りはなくなり、この曲も埋もれてしまいました。

この曲に限らず、**盆踊り曲に歌われた光景をたどってみると、**あるはずの地蔵がない、見えるはずの東京タワーがその場所からは見えないなど、**失われた港区の姿を知ることができます。**ご当地曲を歴史史料と北島さんが考えるゆえんです。当時を知り、この歌の通りかどうか証言できる人も次第に少なくなる中、埋もれたご当地曲の発掘を急ぐべきだと北島さんは考えています。

練習会――盆踊り大会を迎えるまで

盆踊り大会当日を迎えるまで、９回の一般公開練習会をはじめ、町会や保育園・幼稚園などでの練習会や、「跳べ！２０２０」のＤＶＤ配布、振付動画をネット配信するなど、踊りを覚えてもらう準備をしてきました。

一般公開練習会では、最初のうち、曲をかける前に振付の動作を一つ一つ丁寧に説明、次に曲をかけ、マイクで一つ一つの振りを説明しながら、皆で踊ります。初めての参加者はもちろん、曲数が多くなかなか覚えられない人も多く、紫色のおそろいの浴衣を着たメンバーがお手本として踊る姿を見よう見まね、手まねで覚えていきます。難しい振付の曲もあって、覚えるのは大変。しかし、「他では踊らない曲がたくさんあるので楽しい」と言う参加者も少なくありません。中には、各地で行われる盆踊り大会・練習会情報をネットの専用サイトで調べ、参加したという人もいました。

北島由記子（きたじまゆきこ）さん

細谷厚誌（ほそやあつし）さん

練習に参加する人たちの年齢は様々で、港区在住・在勤者はもちろん、区外から参加してきた人もいます。区の広報に掲載されたこともあり、練習参加者は多く、毎回１００人近くが参加しているとのこと。**実行委員会メンバーやその仲間たちによるＳＮＳを使った情報発信・拡散も効果があるよう**で、ＳＮＳを見てイギリスから問い合わせを受けたこともかつてあったと言います。

「みんな一緒に」のために

前半15曲を終えたところで15分間の休憩。休憩の間、今回の盆踊り大会を力強い太鼓の音で盛り上げる、日本太鼓「大角会」によるパフォーマンスが行われます。打ち手各々が打つ異なる複雑なリズムが合わさり、ダイナミックに鳴り響きます。見事なパフォーマンスに、踊りの参加者はもちろん、さっきまでベンチで踊りを眺めていた外国人旅行者も最前列で拍手喝采。打ち手は卒園式を終えたばかりの６歳の男子、小・中学生の女子、高校生の男子、そして成人女性に年配のお師匠と世代も様々です。

休憩中に、盆踊り大会の運営実務担当の細谷厚誌さんに話を聞きました。練習会でマイクを握って踊りの振りを説明する役割を担っている方です。今日は音響の設営・管理などを担い、全般に目を配りながら進行管理を行っています。いつもの紫の浴衣姿ですが、踊りの輪には加わらず、裏方に徹すると言います（１日目は結局踊ることはなかったものの、２日目には櫓に上がって踊る姿も）。

盆踊りで最も大事にしていることは「皆が一緒に踊れること」。今回、新曲を取り上げるにあたって振付をどうするか、**誰でもが踊りやすく、覚えやすい振付にするためにメンバーで真剣に議論した**そうです。振付を得意とする高校生メンバーから聞いた「踊りの型にはこだわらず、歌詞に合った、分かりやすい振付にしようとしている」と言う話とも重なります。しかし、〝歌詞に合った〟振付と〝踊りやすい〟振付が両立しないケースもあり、細谷さんによれば、そこが今回の振付で

苦心したところとのこと。

一般公開練習会も回を重ねるごとに、参加者の踊りは自信にあふれ、動きもそろっているように見えたのも、練習を重ねて踊りを覚えたのはもちろんのこと、**参加者の意見なども聞きながら、回を追うごとに踊りやすい曲に絞り込んでいった**結果でもあります。

困難を極めるご当地曲発掘

ご当地曲を探し出し、音源があればまだしも、見つからない場合は音源を新たにつくり、振り帳(振付表)がない場合は、新たに振り付けなければならない……わずかに残る歌詞カードや三味線譜をもとに五線譜につくり直し、演奏し録音するなど、この作業には大変な苦労が伴います。

ご当地曲の所在にしても、実は**ご当地曲の多くはレコード会社に音源も資料も、記録すらも残っておらず、人から伝えられる情報が頼り**となります。踊り仲間を通じてもたらされる情報をもとに、遠くは山梨県や福島県にまで音源を探して訪ねて、空振りに終わったことも。当然、時間もお金もかかります。歌詞や曲その他の**著作権などの権利関係を調べ、クリアする手間も大変なもの**です。

それでも、ご当地曲の発掘と保存・継承にかけるのは、それが歴史史料としても貴重なことはもちろん、それらの曲が**コミュニティのアイデンティティに関わり、地域にとって大事なものである**という思いがあるからです。

コミュニティの再生、そして防災へ

盆踊り大会に子どもから高齢者まで、皆が参加して、**一つの場所で踊って顔見知りになり、世代間交流が生まれる。そこでできる人間関係は深くはなくても、発災時に互いに助け合えるようになる**など、何かあった時の力になる。顔見知りになれば、それまで臆していた人たちも、防災訓練に来るようになる。町会役員しか出ない防災訓練に意味はない——この信念に支えられ、盆踊りを通じて人と人とをつなぐ、地域と人をつなぐ、地域と地域をつなぎ、コミュニティの再生を図る意義が、この活動にあるとの強い思いがあります。

その背景には、ひとり親として3人の子どもを地域の人々の力を得て育てた、北島さんの経験もあるかもしれません。地域での人間関係をつくる中で西麻布霞町町会の盆踊り大会に深く関わるようになり、そこから現在の発掘ご当地曲盆踊りで「人と地域を元気にする」発想へとつながっていき、さらに東日本大震災の経験を経て、防災という大きな目的を持つことにもなりました。

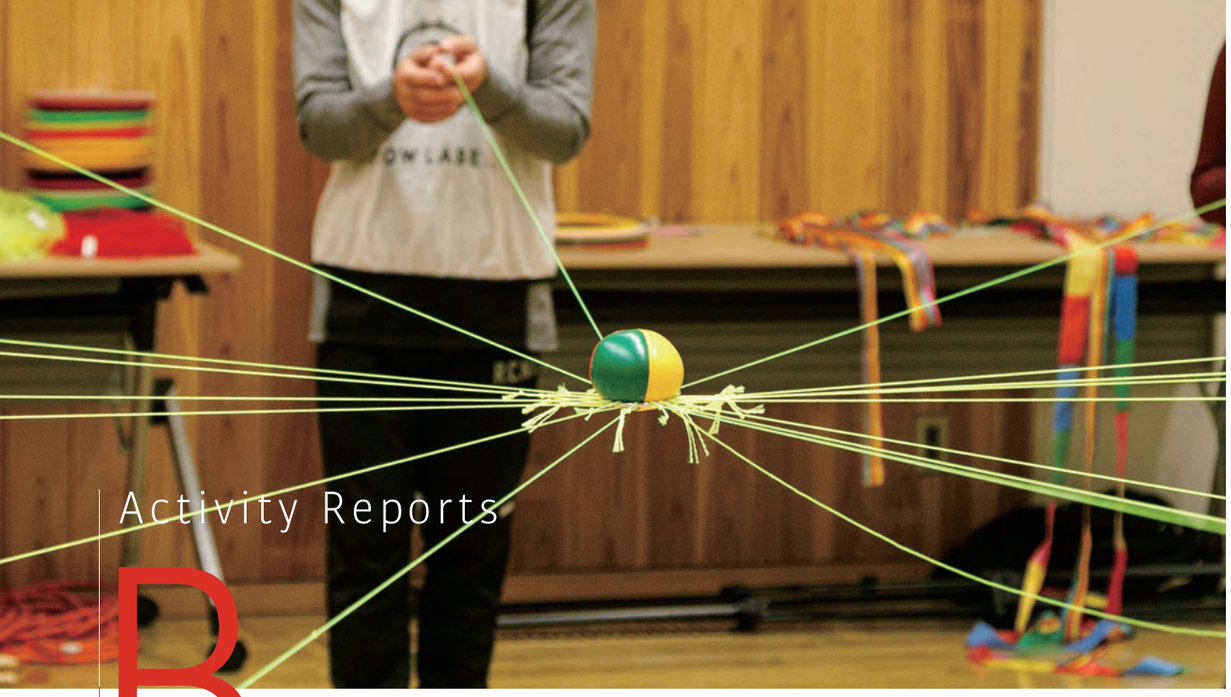
活動する上での課題と今後の夢

町会から始まり、各地の盆踊りや様々な踊りの講習会に参加するうちに築き上げてきた人とのつながり、さらに仲間が仲間を呼ぶことで広げてきた発掘ご当地曲盆踊りの活動ですが、**今後の活動の核になる次代の担い手を育成することが課題**と言います。若い人の活動への参加がもっと必要と考え、メンバーが知り合いを連れて来る、サイトを見て遠方から来てもらうなどしていますが、仕事や家庭の事情で活動を離れざるを得ない場合もあり、なかなか難しいとのこと。

もう一つの課題は資金です。ご当地曲を発掘し、それを次代へと保存・継承するために音源として残すには、相当のお金が必要となります。この課題解決のため、いまメンバーで**検討しているのはクラウドファンディングの利用**だと言います。

いずれ実現したい夢もあります。盆踊り大会と防災訓練を同じ会場で同時開催することで、盆踊りに来た人も訓練に参加してもらえれば、より多くの人に防災について学んでもらえます。盆踊り中の避難訓練などもぜひやりたい。**発掘ご当地曲盆踊り大会の会場を都立芝公園にしているのも、防災訓練と盆踊り大会の共同開催が可能な広さがあると考えてのこと**。越えなければならない様々なハードルはありますが、実現に向け動き始めています。

(岩瀬豪)



ソーシャルサーカスワークショップの“ソレイユ”

Activity Reports

B

文化芸術のチカラで 人と人とをつなぐ

スロームーブメント実行委員会

「SLOW MOVEMENT Showcase & Forum vol.3」

年齢も、職業も、障害の有無も越えるソーシャルサーカスの実践

——紐をもっと強く引っ張って!

——窓側のひと、もう少し左に!

東京で初雪が舞った2019年1月12日(土)、港区スポーツセンターで、かけ声が響きます。円状に広がった参加者たちが手に持つ紐の中心には、金属製のリングに載ったボール。皆で紐を引っ張り、リングごと浮かせて離れたところに立つポールまで移動し、ボールだけをポールの上に着地させるというゲームです。ソーシャルサーカスでは〝ソレイユ〟と呼ばれるプログラムです。全員が呼吸を合わせて正確に行う必要があるため、誰もが真剣な表情です。

「ソーシャルサーカスワークショップ」(以下「WS」という。)に集まったのは、港区在住・在勤者を含む19人。車いすの高齢男性は「家はここから150mです。リハビリになるかと思って参加しました」と自己紹介。障害のある人やない人、年齢層もばらばらで、職業も会社員や福祉関係者、ジュエリーデザイナー、音楽療法士、スポーツトレーナー、ジャグリング・パフォーマーなど様々です。**障害のある方などの社会参加を支える人たちを育てることも、このWSのねらいの一つ**です。

小さな成功体験の積み重ねが、自分と周囲に変化をもたらす

チーム作業には〝ロープ〟もありました。参加者たちは、等間隔で円陣を組み、両手で太い綱を握ります。少しずつ後方に重心を移しながら腕をゆ

ソーシャルサーカスワークショップの“皿回し”

Power of Arts and Culture ∞ Guide Book
文化芸術のチカラ∞ガイドブック

ソーシャルサーカスワークショップの“ロープ”

っくりと伸ばしていくと、綱がピンと張られて直径3メートルぐらいのきれいな円を描きます。WSの進行役を務めるスロームーブメント実行委員会のパフォーミングディレクターでサーカスアーティストの金井ケイスケさんが、「これだけ綱がきつく張られていれば綱渡りができますね」と言うと、大きな歓声があがりました。

ジャグリングや皿回し、バランスなどにも挑戦。苦戦しながらも、初めて挑むサーカス芸に誰もが夢中です。

「ちょっとした成功体験で、自分自身を肯定できたり、お互いを肯定し合ったりできます。そういう経験の積み重ねで、日々の周囲の人たちとの関係も変わっていきます」（金井）

WS後、参加者からは「あっという間の3時間」「普段は使わない筋肉を使ったためか、身体がやわらかくなった」「初めて会ったメンバーでソレイユができた！良い経験です」などの感想が聞かれました。また、区内の会社に勤めている女性は「私には軽い障害があって、最初は、障害のある人にどんな指示を出して、どのように動かすのだろうと心配でした。**実際に体験してみると、自然にチームワークが生まれていて、視覚障害のある人には声をかけたり、車いすの人には自然に場所を譲っていました。今日の体験を皆に伝えたいと思います**」と話していました。

特別支援学級にも展開

2019年2月4日（月）には、六本木中学校の体育館でWSが行われました。スロームーブメント実行委員会にとって、特別支援学級でのWSは初めて。

参加者は、特別支援学級の生徒6人と3人の先生。ジャンプや歩きながらのタッチなど、軽いウォーミングアップの後、体操マットを使ったプログラムもありました。床に敷いたマットに、横になったまま回転して進んだり、補助してもらいながらの倒立を一人ずつ披露したり。見守る先生や保護者の拍手を浴びて、生徒たちには満面の笑みが浮かびます。

WSを終えた生徒たちからは「またやりたい」という声が聞かれました。先生たちも「今日したことを普段の授業にも取り入れてみたい」と。さらに副校長先生は「体育館のガラス越しに他の生徒たちも興味深そうに見ていました。新入生はいろいろな小学校から集まり、外国人もいます。4月の入学時期、新たなクラスメイトとの一体感や仲良くなるためのきっかけづくりとして、WSをしても良いのかもしれません」と話していました。

成功のポイントは、参加者に合わせたプログラムをつくること

より効果的なプログラムとなるよう、WS当日を迎えるまでに先生たちと事前の打ち合わせを何度か行い、ソレイユなど定番プログラムのほか、生徒たちが好きなジェスチャーゲームなども取り入れました。

「プログラムづくりで心がけているのは、前もって参加者のことを知って、その人たちが夢中になれるものを取り入れること。例えば、ジャグリングに興味がありそうなら、その時間を増やす。その道具をつくるところから始めてもいい。サーカスの芸は幅が広く、アクロバティックなものから、クラウン（道化）のように、言葉を使わないで人をどう笑わせるかといったジェスチャー的な芸もあります。また、逆立ちをする時に補助が必要で、人の身体に触れざるを得ない場面もたくさんあるので、人に触れることが苦手だった人も身体的コミュニケーションにだんだん慣れていきます」（金井）

六本木中学校でのソーシャルサーカスワークショップ

また、**WSを行う際には、安全面に十分配慮し、個々の参加者の障害の種別に合わせた人員配置を心がけている**そうです。六本木中学校でのWSの際にも、3人の進行役のほか、サポートする人たちも3人配置されていました。

金井（かない）ケイスケさん

ヨーロッパから日本へソーシャルサーカスの広がり

ソーシャルサーカスの歴史は、四半世紀前の欧州のサーカスに始まります。文化庁海外派遣研修員としてフランス国立サーカス大学に留学し、その後、フランスのサーカス団で活躍した経歴を持つ金井さんは「ソーシャルサーカスは、プロのサーカスアーティストを育成するということよりも、サーカス体験を共有しながら社会に生きる能力を育てることを目的に発展してきた」と振り返ります。

事実、ソーシャルサーカスは社会で自分の役割が見出せない人がもう一度社会とのつながりを取り戻すきっかけとなったり、移民の人たちが地域に馴染むためのツール、あるいは貧困やアルコール・薬物中毒などで社会的に疎外された若者たちのリハビリテーションの手法として活用され、今や欧州だけでも20数か国に広がっていると言います。

一方、スロームーブメント実行委員会がソーシャルサーカスに取り組むようになったきっかけは、これまで障害者と一緒にパフォーマンス作品をつくってきた中で、参加者から「身体が動くようになった」「物おじしなくなった」といった声が聞かれたことでした。その気づきから、ソーシャルサーカスと出会います。日本でも人気のあるサーカス団「シルク・ドゥ・ソレイユ」は、15年以上も前から社会貢献活動としてソーシャルサーカスに取り組み、プログラム開発やその効用の検証などを行っていました。スロームーブメント実行委員会は、**その手法を学びながら、日本に合わせたプログラムを開発して、今まさに、ソーシャルサーカスの普及に取り組んでいます。**

重なり合う区とスロームーブメント実行委員会の問題意識

港区文化プログラム連携事業として共催する区の担当者は**「総合計画の重点課題の一つとして掲げているように〝共生する地域社会〟は区にとっ**

SLOW MOVEMENT Showcase & Forum vol.3／ショーケース

臨済宗妙心寺派龍源寺

C

文化芸術のチカラで 歴史と現代をつなぐ

慶應義塾大学アート・センター

「都市のカルチュラル・ナラティヴ: 地域文化資源インターンシップ―地域文化の現場を訪ねる講座」

人の縁をつなぐ 地域に開かれた寺院

白金高輪駅から北東に歩いて約5分。桜田通りから一本入った通り、古い家並と高層マンションが混在する一角に、龍源寺があります。古い石柱の山門、それと対照的なモダンなバリアフリーの本堂へと足を踏み入れます。

2018年10月13日(土)、「古川のほとり・龍源寺からのまなざし:寺院文化の現在」と題されたレクチャー&座禅ワークショップに参加しました。

前半は、18代目住職の松原信樹(しんじゅ)さんと、慶應義塾大学の國本学史(くにもとのりふみ)講師との対談が行われました。対談では、住職が102歳で亡くなった祖父・松原泰道(まつばらたいどう)さんから聞いていた歴史の話や、福澤諭吉や慶應義塾との関係が語られていきます。古川は鮎も生息するような清流だったこと。寺の松の木の下には茶屋があり、だんごが名物だったこと。現在はマンションばかりになってしまったけれど、かつては都電が走り、銭湯や八百屋や肉屋などが軒を連ねる商店街が賑わいを見せていたこと―。

寺は中津藩と縁が深く、中津藩出身の福澤諭吉の妻・トキの実家も檀家でした。さらに、明治3年頃、慶應義塾の外塾(分校)として機能し、50人程度の塾生が生活していたことが寺に口伝えで残っていました。このことは地域の歴史研究家が検証し、慶應義塾百年史に記載されています。

薬師寺元管主・高田好胤(たかだこういん)の縁で、住職の祖父が書いた般若心経入門の本は、ベストセラーに。第一次仏教ブームをもたらし、住職の祖父は、生涯で100冊を超える著作を残しました。こうしたことから龍源寺は、企業研修を依頼されたり、グラフィックデザイナーの横尾忠則(よこおただのり)さんと絵の会を開いたり、写経会を持ったり、社会に開かれた寺として活動をしてきました。現住職もそれにならい、仏教や禅といういわゆる「古典」を、現代の文脈・価値観に合わせて再生していこうと執筆やイベントを企画しています。今回は、本堂1階で古川界隈に関する資料を展示していました。

東京の中心で 静寂を体験する

後半は座禅のワークショップです。障子からかすかな光に、イタリアのサーカスアーティストと日本の障害のある参加者3人が、ワークショップの成果をショーケースとして披露しました。続いて、ソーシャルサーカスの可能性をテーマに、イタリアのサーカスアーティストやスロームーブメント実行委員会の栗栖良依(くりすよしえ)実行委員長、金井さんによるディスカッションが行われました。

興味深かったのは、ディスカッションで示されたソーシャルサーカスの3つの方向性です。1つ目は、作業療法や医療分野での活用です。リハビリテーションを嫌がる子どもでもサーカスの要素を加えることで興味を持つかもしれません。2つ目は、ひきこもりの状態にある人や、障害や年齢等が理由で社会とつながることを難しく思っている人の背中を押し、自身の自己肯定感を育みます。3つ目は、人種、性別、障害など様々な背景を持っている人々が地域で共に暮らしていく中で、ソーシャルサーカスという場が、多様な人との出会いをもたらし、協働していく意識を育みます。

「障害がある人を中心にWSを始めていますが、共生社会の実現のためには、より多様な人たちに参加してほしいと思っています。**ソーシャルサーカスを、様々な環境にある人たちをつなぐプログラムとして発展させていきたい**と考えています」(野村)

港区で始まる ソーシャルサーカスの未来

ソーシャルサーカスを共生社会の実現に役立てていくためには、もっと多くの人に知ってもらい、体験してもらうことが鍵となってきます。港区スポーツセンターでのWSの参加者募集の際には、団体のホームページやSNS、区の広報に加え、障害のある方向けの事業でチラシをまいたり、施設に直接説明にうかがったりしました。その結果、定員の倍、約40人の応募がありました。

「2017年にWSを実施した際には、参加者が集まらなくて苦労しましたが、早めに準備し計画的に周知することで、ようやく多くの区民の皆さんに来てもらえるようになってきたと感じます。今後は、地域の人たちと定期的にWSを開催していくことも考えていきたい。継続することで、技も磨かれてより楽しくなるはずです。また、多様な人との交流やコミュニケーションも広がってくると思います」(野村)

港区文化プログラム連携事業をとおして、区内にソーシャルサーカスという新たな種がまかれ、今、着実に芽吹き、新たなムーブメントとして発信されようとしています。(田中健夫)

野村梢(のむらこずえ)さん

SLOW MOVEMENT Showcase & Forum vol.3／ディスカッション

SLOW MOVEMENT Showcase & Forum vol.3／ショーケース

SLOW MOVEMENT Showcase & Forum vol.3／栗栖良依(くりすよしえ)さんによるプレゼンテーション

座禅ワークショップ（龍源寺）

がもれ、静寂が辺りを包みます。時計など体を締め付けるものを外し、座禅を組みます。眼はつぶるかつぶらないかの「半眼」に。丹田（たんでん）（へその下あたり、気が集まるとされるところ）を意識しながら呼吸を整えていきます。「ここは聖地です。聖地の良いものを入れて、中から悪いものを出していくイメージで。感覚を一点に集中して」。住職の声が響きます。休憩を挟み、20分の座禅を2回行いました。あっという間のような、長いような不思議な時間。合掌し、一礼して足を崩します。

「凝縮された時間を皆さんと共有させていただいたこと、私自身大変嬉しく思っております」と住職。最後に短く講話をし、「寺という非日常の空間・聖地に身を置き、気づきを得てもらえれば嬉しい」と結びました。

「気持ちがすっきりして、物事の見方、視点を変えることができると感じました。機会があったらまた経験したい」というのは、座禅が2回目だというイギリスからの留学生。別の参加者は、「地域資源であるお寺について、更に深く学ぶことができました」と話していました。**「数十年前は、お寺が幼稚園を経営するなど、地域に寺が深く関わっていた。これからも、人が集まる場、学びの場としての役割を果たせれば。**もともと慶應義塾大学との縁がありましたが、今回のようなコラボレーションは初めて。学生や教職員に寺のことを知ってもらえて嬉しい。ホームページなどで発信はしているが、今後はもっと地域に開いていければと思っています」（住職）

まつばらしんじゅ
松原信樹さん

都市の物語を紡ぐ人々に出会う

慶應義塾大学アート・センター（KUAC）は、1993年に開設された大学附属の研究センターです。芸術に関する研究や展覧会、大学の文化財の修復や公開、現代芸術のアーカイヴ運営など、現代社会における芸術活動をテーマに幅広く活動しています。

「都市のカルチュラル・ナラティヴ」の2018年度のテーマは、「地域文化資源インターンシップ―地域文化の現場を訪ねる講座」。講座に参加する人たちが、文化資源を支える人々に出会い、いわば「インターンシップ」のようにその活動を体験しながら、地域の文化資源について一歩踏み込んだ知識を得ることをめざしました。

KUACのキュレーターで当事業を考えた本間友さんは、きっかけをこう語ります。「KUACは、国内外から訪れる研究者やアーティストと、現代芸術について、協働で研究しています。彼らは調査研究の傍ら、精力的に周辺を観光するのですが、現代文化と伝統文化を別のものとして捉えているようで、**地域に根差した文化には時代を超えてつながる物語があるにもかかわらず、それがうまく伝わっていないことに気づいた**んです」

過去から現在へつながる都市文化の物語を改めて多くの人に示そうと考えた時、大学や文化機関などにおける学術活動の重要性が浮かび上がってきたと言います。一般にはアクセスしにくい学術情報のネットワークと、地域の文化資源をリンクさせ、展覧会やイベントを通じて紹介する。イベントで知的好奇心が刺激された参加者が、身の回りの文化資源についてもっと知りたいと思ってアクションを起こす。そうした循環を生み出すことができれば、「都市文化の物語」はより分かりやすく、私たちにとって身近になり、「自分ごと」として守り、継承していくものになるのではないか―。

この事業を始めるにあたり、本間さんをはじめとするプロジェクトメンバーは、まず、地域の文化資源の調査を行いました。**寺院などの「場」にこまめに足を運び、交流を重ねながら、丹念に関係性を築いていきました。**

「今年度の事業で感じたのは、人々が語る物語の中では、過去と現在の地域文化がつながっているということでした。泉岳寺の境内ツアーでは、江戸時代の赤穂義士との関わり、明治維新や戦災への対応、いまの子どもたちが通う書道教室などについてお話をうかがいました。それに加え、檀家さんや地域の方、赤穂義士ファン、研究者、修行する僧侶など、関わる人ごとに異なる泉岳寺の姿、寺院の物語があり、それぞれの視点で過去と現在の文化がつなぎ合わせられています。このような豊かで複雑な文化の物語をつなぎ伝えるために、大学のできる仕事は何か、深く考えさせられる事業となりました」

ほんま ゆう
本間友さん

ギャラリーにも土地の物語と広がりが

多くの美術館・博物館が立地する港区には同時に、1万2千か所を超えるアートスペースがひしめいています。2019年2月、竹芝の地で40年近くにわたり活動してきた現代美術画廊、横田茂ギャラリーを訪ねる企画が催されました。ギャラリーのオーナーである横田茂（よこたしげる）さんによると、「もともと日本橋にあったギャラリーを竹芝に移したのは、倉庫街という空間で作品を展示することに魅力を感じたから。**竹芝／浜松町は物流の中心でもあり、人々の日常が行き交う場所ゆえに現代美術ギャラリーと親和性が高いと考えた**」と言います。再開発により著しく変化する竹芝。2018年11月に移転した現在の建物は、バブル時代にはナイトクラブだったそうです。バックヤードの見学では、当時パフォーマーの女性たちが楽屋として使用していた部屋が、現在は美術関連資料の書庫として使われていることも紹介され、移り変わる時代の流れを肌で感じる不思議な体験となりました。

学校建築にまつわる「記憶」と「記録」

2018年10月、「学校建築をめぐる」が開催されました。慶應義塾大学三田キャンパス内には、通常は非公開の「演説館」（1875年竣工）や「旧ノグチ・ルーム」（設計：谷口吉郎、内装：イサム・ノグチ、2005年移築・設計：

学校建築をめぐる（演説館）

隈研吾）をはじめとする貴重な建築物が現存しています。これらを回るガイドツアーに参加した人たちは、建物の成り立ちや様々な意匠に関する学芸員の解説に、熱心に耳を傾けていました。

　このように大学は、近代日本の歴史を体感できる場である一方で、新校舎の建設や耐震工事などの事情により、たとえ歴史的建造物であっても、常に解体や改築の危機に直面しており、建築そのものを残すことが難しいという側面もあります。講演会では、慶應義塾大学や文化庁国立近現代建築資料館、明治学院大学、学習院大学による、建築物や建築に関する記録を保存・活用し、未来に残すための取組が紹介されました。学生や教員、地域の**人々の中にある「学校建築」の記憶を記録し、竣工以来の歴史的時間を記憶している「学校建築」を地域に開いていく取組は、今後ますます重要となる**でしょう。

事業の成果を可視化する

　プロジェクトの最後は、冊子「ＡＲＴＥＦＡＣＴ（アルテファクト）」の制作で締めくくります。これについて本間さんは、**「プロジェクトの活動記録であり、好奇心の種を埋め込んだ雑誌でもある**んです。これを起点にして調べられるし、連想が広がる。いろいろな関心を渡り歩いていけるようなものにできれば」とその意義を説明します。

　さらに２０１９年１月28日（月）には、当事業に関わった人たちが集まり、ＣＶＣＡ*という手法を用いて、ワークショップ形式の振り返りが行われました。８人の参加者が２班に分かれ、それぞれの立場から、寺などの文化資源、文化団体、大学、行政、区民、観光客、学生など様々なファクター同士の関係性を「見える化」し、新たな価値を発見していきました。

**　文化資源が社会でどのような役割を持つか、事業の実施者だけでは見えてこない部分があります。参加者や協力者と一緒に考えることで、文化資源の価値循環の広がりが見え、福祉など別の分野・サービスにもつながっていく。**ここうして、今後の活動において視野に入れておきたい課題や目標が見つかりました。

「カルナラ」のこれから

　東京２０２０大会開催を目前に、文化資源を掘り起こし、価値を見出し、編集する試みが、都内のみならず全国で展開されています。**「都市のカルチュラル・ナラティヴは、足元の地域を新しい目で見ることの大切さ、さらには、これまでにない横のつながりが生まれていく可能性を、教えてくれます。**「例えば、ＳＮＳで多くの情報に触れているように感じても、実際は自分の好きなこと、関心のあることにフォーカスしているにすぎません。通販サイトでＡＩが送ってくる数々の『おすすめ』もまた、興味関心を狭くしているように思えます。だからこそ、横への移動軸が重要で、今後は、『横移動』のダイナミックな面白さを伝えたいんです」と本間さんは語ります。

　文化資源の過去から現代までの物語を知り、未来へとつないでいく縦の時間軸に、横への移動軸が加わることで、今後、より広い視野で文化の物語を紡いでいこうとしています。

（土屋典子）

＊ＣＶＣＡ（Costomer Value Chain Analysis・顧客価値連鎖分析）スタンフォード大学の故石井浩介（いしいこうすけ）氏らによって開発されたもので、関係する全てのステークホルダーを洗い出し、それらの間でやり取りされる要素（お金や情報など）を整理しマップに落とし込むことで、どのような価値が誰に提供されるのかを可視化する分析手法。

CVCAの様子

大学の建築フォーラム

横田茂ギャラリー

おわりに

Epirogue

文化芸術のチカラで地域をつなぎ、
人と人とをつなぎ、歴史と現代をつなぐ――

このガイドブックから、
文化芸術のチカラを感じることができたでしょうか。

相手のことを知らないことが、壁をつくり、バリアとなり、
文化芸術には、そんな壁を取り除くチカラがあります。

区民の皆さんには、
身近な場所で行われている文化芸術活動に足を運び、
そんな文化芸術のチカラを自ら、
肌で、感じていただれば、嬉しく思います。

既に文化芸術活動を行っている皆さんにとっても、
改めて文化芸術のチカラについて考えるきっかけとなり、
今後、事業を進める上でのヒントとなれば幸いです。

文化芸術のチカラ∞ガイドブック ～港区ならではの文化プログラムをとおして～

2019年3月発行
発行　港区
編集　港区産業・地域振興支援部　国際化・文化芸術担当
住所　港区芝公園一丁目5番25号
電話　03-3578-2111（代表）

港区は、みどりの保全とごみの減量に努めています。
この印刷物は、古紙を活用した再生紙を使用しています。

刊行物発行番号　30300-3211

MINATO CITY